



日 雇い応援を始めたのは、去年の初夏だった。春を迎えてほぼ一年が経ったことになる。夏から秋にかけて草取りばかりだったが、冬が近づくと掃除が多くなって、春になったら畑仕事が入って来た。人の頼み事も季節の色をまとう。

「少し前までしていたのにできなくなった。」依頼してくる独居老人は、だれもがそう言う。介護サービスを受けている人もある。どんな制度も多かれ少なかれ融通が利かないものだろうけど、介護保険もその例に漏れず、例えば訪問介護員に草取りや畑作業をしてもらうことはできない。日常生活を営む上に必ず必要な行為ではない、というのがその理由だ。日常生活の質なんて必ず必要とは言えない行為の厚みによるのだから、それを一律対象外にしてしまつては何だかとても味気ない。どこかに線を引くしかないことは分かるのだが、かくしてその穴を埋めるべく、我々の日雇い応援が要請される。有償ボランティアなので、民間の家事代行サービス業に比べれば三分の一以下の料金で済む。それでも作業に時間がかかればそれなりの金額になるので、依頼したくてもできない人は少なくないだろう。

父は、亡くなる直前まで植木や盆栽をいじっていた。日当たりを確保するため、前庭に二階建てのバル

コニーを作つて盆栽を並べ、剪定や水やりにいちいち梯子で上り下りしていた。九十になつても平然としていたが、見ているこちらが気が気でなく、何度も説得した。でも、「これだけはやらしてごせ」と言つて聞かなかつた。他にわがままなことは何一つ言わなかつたが、徐々に減らしはしたものの、植木と盆栽の手入れだけは最後の最後まで手放さなかつた。

植物にほとんど興味のないぼくは、父が亡くなると盆栽も盆栽もすつかり片づけてしまった。「ほんとにこれ捨ててしまつていいですか。」

大工さんに念を押される度に、胸はチクリと痛むのだが、惜しんでいたら扱いきれぬ荷物を抱えることになる。ぼくは痛みを感じずに済むよう制度設計するみたいに線を引く。「全部片づけちゃつてください。」
「いやあ、これから楽しみだ。いえ、たいしてできなくてもいいんですよ。ここで育つていくのを見るのが楽しみなんだから。きれいになつた畑を見るのはうれしいねえ。」

ベッドに横たわつたまま、ヘルパーに支えられて膝を曲げ伸ばししている老人が、作業を終えたばかりに言う。うれしいうれしいと何度も繰り返す老人にぼくもうれしくなつたのだが、何だか悲しくもなつてしまふのだった。

専門ババ奮闘記 (その2)138

木幡智恵美

コロナ感染 (6)

私たち一家、そして娘一家を襲つたコロナウイルスは、その後夏に第七波、冬に第八波を引き起こした。それが、今のところは落ち着いている。先日、武道館の更衣室で道着に着替えていると、高校生らしき二人が、「ねえ、コロナ何回罹つた?」「二回」「うちも二回」と、大きな声で話していた。コロナの感染が始まつた頃には考えられない会話だ。五月には、二類から五類に引き下げられるコロナウイルス感染症、まだ連日死亡者が出、これからどんな変異種が出てくるか分からない。悔ることなく付き合わねばならないだろう。

さて、専門ババ奮闘記(その2)も、新型コロナウイルス感染症が世界中に広がりが、島根でも感染者が出た頃に始まつて丸三年。書き始めた頃の約一年前の出来事から記し、今に追いついた時点で終わろうと思いつつながら続けたが、いつまで経つても追い付かない。コロナが落ち着いたところで、一旦終わりにしようと思う。

専門ババはというと、寛大がもうすぐ春休みになり、保育園を育了する実歩が四月一日から半日児童クラブ慣らしをすることになるといふことで、三月末から四月初旬までは、孫たちと過ごすことが多くなる。寛大と過ごしていた土曜日には、実歩も加わる。寛大とは、足湯に行つたり、自転車に乗れるようになってからは宍道湖畔まで出かけたたり、家の中ではレゴや粘土などをしたりしてきた。実歩は寛大と違う遊び方だから、二人相手にどうやって過ごそうか。まずはお弁当作りをしてお花見にでも行こうかな。

二月中、度々熱を出して預かつた宗矢は、一緒に居る時間が多かつたからか、「ババ大好きだよ」と言つてくれる。これが、いつまで続いてくれるだろうか。

ということ、専門ババはこの先もしばらくは奮闘するわけだが、果たして(その3)はいつ書けるだろうか。いや、寛大も四月から三年生、すでに手に負えない場面が出てきている。そのうち、ババなど相手にしなくなるだろう。実歩だつて、小学校が上がれば、友だちがよくなくていくに違いない。(その3)は来ないかもしれない。でも、そうでなければならぬのかもしれない。(終わり)

30代フリーター まさかと思われていたロシアのウクライナ侵略が現実となり、かつてなら勝負にならないと思われていたアメリカと中国のせめぎ合いが常態化するなど、世界はとらえがたく、予測困難になっている。

年金生活者 唯物史観が通用しない時代になったということだ。この史観は呼称こそマルクス主義に独特のものだが、中身は西側陣営によっても採用されてきた。それが明瞭にあらわれたのが、ロシアや中国に対する見方だ。

西側には、ロシアも中国も統制経済から市場経済への転換で民主主義の国になるだろうという期待があった。その根拠になっていたのが、市場経済という土台の上には自由で民主的な政治が上部構造として築かれるはずだという唯物史観にほかならない。

現実はその期待を裏切った。共産主義を捨てたロシアはプーチンをツァーリとする「帝国」として復興し、侵略戦争まで始めた。世界第2位のGDPを達成した中国も習近平を「皇帝」と

する「帝国」として復興を遂げ、アメリカと無血の戦争を繰り広げている。

30代 西欧諸国では、資本主義の土台の上に民主制が上部構造として乗っかり、発展していった時代があった。

年金 第2次産業を牽引車とする産業資本主義の時代だ。ここでは自由な市場で売買される等質な労働力が利潤の源泉として必要とされた。そんな労働力を確保するのに自由と民主主義は恰好のイデオロギーとなった。

現在の資本主義は第3次産業を牽引車とするポスト産業資本主義だ。利潤の主要な源泉は賃労働からイノベーションに移った。工場労働を担う等質な労働力よりも、イノベーションを引き起こす稀有な労働力のほうが効率的に利潤を上げられるようになった。産業資本主義の発展に寄与した自由と民主主義のイデオロギーはポスト産業資本主義には必ずしも必要でなくなつた。それが、ロシアや中国に見られる「帝国」の復興の背景をなしている。このことを別の角度から見ると、ポ

され、作中の〈誰か〉という含みはきえる」

この転換が「祖国はありや」という問いを切実なものにしている。ここで詠われている「祖国」は、自らと世界をつなぐ紐帯を象徴する言葉、あるいは、自分の住まう世界の具体的な姿を指し示す言葉と解することができる。

スト産業資本主義はこれまで人類史を支配してきた富の稀少性を急速に縮減させ、その結果、土台としての経済は政治や文化などの上部構造を拘束する力を失っていったと言いうことができる。富が潤沢になり、奪い合いの対象でなくなれば、人間の生活も社会も経済に左右される度合いは低下する。上部構造がどうなるか、その可能性は多様になり、必ずしも民主主義が必然ではなくなる。

30代 危ない時代になった。年金 寺山修司の「マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」という歌を知っているだろう。これをそっくりタイトルに含んだ論文が『流砂』23号に掲載されていた（御館博光「加藤典洋からの贈り物 II —『マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや』（寺山修司）」）。久しぶりに目にしたこの歌から、霧に覆われた世界にいるような今の自分の状態を連想した。マツチを擦って、つかのまの明かり

だが、その世界は深い霧に覆われた海のように、白い闇の中に隠されたままで、自分が世界とつながっているかどうかさえわからない。

「身捨つるほどの」とは、わが身と世界とのつながりが確固としているという意味だとすれば、つながりが強ければ強いほど、世界が危機に陥つたと、わが身は減ぶ可能性が高まる。そんなつながりを「ありや」と問うのは、つながりに手ごたえを感じられないことの表出と理解することができる。それでも、マツチを擦り続けなければ、何かを書き続けなければ、海を覆う霧さえも、世界を隠す白い闇さえも感じるができない。

30代 「身捨つるほどの祖国はありや」は国家批判、愛国批判を含んでいるようにも思える。

年金 この歌を『言語にとつて美とはなにか』で初めて知ったとき、私もそう感じた。だが、今は自分自身への問いを起動する作品としてこの歌に再会したという気がしている。

30代 寺山自身はどう考えていたかわからない。年金 この歌は、上の句が客観描写の形を取っているのに対して、下の句は「身捨つるほどの祖国はありや」と、一気に主観の表出に転じている。吉本隆明は『言語にとつて美とはなにか』でその転換の過程を次のように叙述している。

「作中の〈誰か〉がマツチを擦るつかのまに霧のふかい海をみたのか、作者の位置から海のふかい霧をみたのか定かではなく、二重の含みをたもっている。そして、おそらく『ありや』ではじめて作者の位置からの表出に集約

ニュース日記 870
中村 礼治

なぜ世界は予測困難になったのか